

「暗闇から」

飯野文彦

昼前の気怠い時刻、玄関の呼び鈴が鳴った。

宅配便で何かを注文した覚えもない。新聞の勧誘か町内会費の請求だろうと、やりすごした。ところが三度、四度としつこい。

玄関を開けた。若い少女が立っていた。

「君は？」

「うふふ」

見覚えがない。家を間違えたのだろう。そう言おうとすると、少女は勝手に話しだした。

「ママと近くまで来たの。ママが教えてくれたんだよ、ここにいるって」

「いるって、誰が？」

それには答えず、

「『いっしょに行こうよお』って言っても来ないし、もう帰るって言うから。あたし、ひとりで来ちゃった」

「君のママって？」

「さて、誰でしょう？」

じっと少女を見た。年の頃なら、七歳ぐらいだろうか。やはり見知らぬ少女だ、思ったとき、ふと面影がだぶる。

「君のママって？」

「じゃあね」

少女は答えず、走り去っていく。

「あ、待って」

サンダルを引っかけ、後を追ったが、すでに少女の姿はなかった。

面影が。しかし――。



智美の親友だった真由子に電話をかけた。なかなか出ない。表示された番号から、私だとわかってる。だから出ないのだ。

切ろうとしたとき、電話が通じた。相手は無言だった。すでにばれている、と知りながらも、

「もしもし、井之だけど」

「よく、かけてこられたわね」

灯火にバケツで水を、ぶちまけるような口調だった。

押し潰されそうな沈黙がつづいた。やっぱりいい、と、切ろうとしたとき、真由子が言った。

「これから、七回忌の法要に行くところ」

「法要って」

「決まってるでしょ。智美の」

「今日が……」

「ぜったいに来ないで。迷惑。今頃になって。あのとき、せめて、お線香の一本でも、上げに来るかと思ったのに」

「七回忌、か」

「急ぐから」

「あ、待って。子どものことだけど」

返事はなかったが、電話は切れなかった。

「子どもがいるのか？」

「誰から訊いたの？」

それじゃ、やっぱりあの女の子は。智美の両親が、育てているのだろうか。それを訊ねる前に、真由子が言った。

「あの日、智美はその検診があつて、病院へ向かう途中だった。心身ともに不安定だったから、そのせいもあつて——」



あの日、真由子から私に電話が入った。

「智美がトラックと正面衝突した。救急車で、K病院へ運ばれたけど。はやく、はやく行ってあげて」

「飲んでるから」

「まだ午前中よ」

「いや、でも」

「タクシーに乗ればいいでしょ。K病院だからね。急いで」

私は焼酎をあおった。前後不覚になつて、潰れた。翌朝になつて、真由子から伝言が入っているのに気づいた。

「お通夜は明日の午後6時から。告別式は明後日の午後1時。場所は××シティーホール」

昼過ぎ、ふたたび電話がきた。出なかった。涙声の伝言が残った。

〔智美は実家に戻った。私から、言いたくないけど、顔だけでも見に来てあげな〕

あの日の夕方近く、私は高速バスで上京した。あてなどなかった。新宿の飲み屋で明け方近くまで飲み、公園で寝て、目が醒めると、日中からやっている飲み屋で飲んだ。

数万円の有り金を使い果たしたのは、三日後で、残った小銭でキセルして、郷里に戻ったのだった。



午後、近くのスーパーで、焼酎とつまみを買っていると、真由子からメールがきた。

智美が生前、真由子に送ったメールの抜粋らしい。事故が起こる、少し前の日付のものだった。

へもう無理みたい。いくら思っても、どんどん離れていくだけ。この間、やっと最終予選まで残ったでしょ。今が勝負だつて。

でも、子どもは産むつもり。このことは、絶対に彼に言わないでね。〕



あの頃、私はとある文芸誌の、新人賞最終予選に残った。一次、二次通過は何度かあったものの、最終ははじめてだった。結果、落選したけれども、編集者から連絡をもら

い、書いたものを送るように言われた。

だが、書けなかった。ぴたりと、涸れきったように、書けなくなった。

他人を避けるようになった。何も訊かれたくない。何を説明したくもない。智美であろうとも、いや智美だからこそ、会いたくない、会えない。

電話で、素っ気なく、伝えた。

「書くことしか考えられない」

以後、電話は無視した。メールや手紙の類は、読まずに捨てた。家に来たこともあったが、居留守を使った。



なぜ、あんなに意固地だったんだろう。今考えると、自分のことながら、まったくわからない。

小説は一向に進まなかった。キーボードに置いた指は動かさず、飲みながらノートパソコンに向かうようになった。白い画面を、じっと見ながら、飲んだ。

時に、飲んで気分が高揚し、まるで天下を取った気持ちで、

「やったぞ。これだ。希代の名作になる」

と紙にメモしたり、あらすじをパソコンに打ち込んだ。

翌日になって見直すと、メモはぐちやぐちやで読めず、パソコンは陳腐で抽象的な言葉の羅列ばかりだった。思わず、キーボードを叩き壊したこともある。



その頃、すでに父母は死んでいた。独りっ子で兄弟もいない。実家に住み、両親の残した、わずかな遺産で、細々と暮らした。

明るいうちから飲み、ふと気がつくと、話している自分がいた。

「そうなんだ。次の作品で、やっと、でかい賞が取れそうだ。そうしたら、賞金でスーツを買って、おまえの家へ行くから」

「何しにくるの？」

「決まってるだろ」

「ありがとう。でも、もう遅いよ」

「遅くなんかあるもんか。待たせたけど、今度こそ、まちがいない」

「そうだね。わかってるよ」

「なあ、そうだろ。ははは、そうか、わかってたのか。うん、おまえが言うなら、まちがいない。今度こそ、ぜったいに、ぜったいに、まちがいない」

ふと我に返ると、汚れた茶の間で、立ち上がり、叫んでいた。

もちろん誰もいるはずはない。ただ掌に冷たい感覚が残っていた。細く、冷たい指に似た感覚だった



見兼ねた遠縁の男が、知り合いの広告会社を紹介してくれた。親の金も底をつきかけており、仕方なく、フリーのライターとして、働きだした。もう四、五年になる。

地方の話だ。スーパーや大型電気店、不動産屋の広告がほとんどだが、タウン誌の仕事も入った。これが、なかなか面白い。細かい直しにカチンと来ることも多々あるけれど、ちよつとばかり工夫を凝らした文章を、

「井之さん、やりますねえ」

と感心されると、眠っていた琴線に響くものがある。



「短いものから、ぽつぽつ書いてみるか」

ふだんなら家飲みをはじめるところだが、半ば無意識のうちに、つぶやき、ノートパソコンを開いていた。

広告会社の、若い男から、電話がきた。

「すみません。今日締め切りのタウン誌なんです、空きスペースができちゃって。 8

00字程度なんですけど、なんか埋めてもらえませんか」

「いきなり言われても」

「何でもけっこうです。お願いします」

「しかし」

「井之さんしか、頼める人がいなくて」

「それじゃあ」

「助かります。午後7時まで、メールしてください」

押し切られるかっこうで電話を切った。時計を見た。午後5時を、わずかに過ぎていた。

ノートパソコンに向かったものの、何も浮かんでこない。端からネタなどないのだから当然だ。よっぽど、うっちゃって、飲みはじめようと思った。しかし、なぜだろう。尻を椅子に接着されたように動かない。

電話がきた。

「もう7時ですけど」

「あと、一時間あれば」

「無理です。30分以内にメールしてください。絶対ですよ」

いつの間にか、雨になったらしい。雨音が催促の言葉と重なって、気持ちを苛立たせる。

「ああ、もう。いきなり言われても」
唸りながら、とにかく指を動かす。



昨晚のことです。ぼくは午前1時前には寝ました。連れ合いは、それより遅く、午前2時過ぎに寝たそうです。

寝ていて、ふと気がつくのと、となりからうなり声がかかります。連れ合いはときどき悪夢を見るとかで、うなされることがあるので、ああ、またかと思っていたら、引きつった声で、

「こんにちは、こんにちは、こんにちは」と言い出しました。

これはこれは、と身体を揺すって起こしたところ、こわい夢を見た、と言います。時計を見たら、午前3時を過ぎた時刻で、まだ外は暗く、どんな夢か訊くと、こっちまで怖くなって、眠れなくなるかもしれない。やり過ごして、寝たのですが。

ふと、気がつくと、隣室からテレビの声が聞こえるのです。

「おい、寝る前に消さなかったのか」

連れ合いを起こすと、

「ええー消したよ。何で、ついてるの」

とおびえながら、消しに行きました。消しに行つてやればよかつたんですが、怖くて布団から出られなくて。ちらり時計を見ると、午前4時を過ぎたところでした。

「ちゃんと消しとけよな」

「消したつてば。だって、さつき起こしたとき、ついてなかつたでしょ？」

そう言われると、たしかに身体を揺すつたとき、テレビの音声は、聞こえていなかったのです。

「どんな夢を見た？」

連れ合いにそう訊ねたのは、朝起きてからでした。

彼女が洗面台で鏡に向かっていると、どこか自分の顔が違って感じられる。変だなあ、と思つて、まばたきをくりかえし、突然やめて、じつと鏡を見つめたら、鏡の中の自分は、依然として、まばたきをつづけていた。

それで、これは自分じゃないと思ひ、こんにちは、と声をかけたと言うのです。

「なんかいる。だからテレビ、ついたでしょ」

そう言われても……。

電話がきた。

◇
◇

「もう7時40分になりますか」

「今、できたところですよ」

「じゃ、すぐにメールしてください」

躊躇いに押し潰されそうだった。

コップに焼酎をなみなみと注ぎ、一気に飲み干す。かっと心身が熱くなる。鼓動の高鳴りにまかせて、送信した。

◇
◇

10分ほどで電話が鳴った。

「いいっすねえ。いや、いいですよ、これ。実話ですか？」

「いや。独り者ですから」

「あ、すんません。いやあ、なかなかです。使わせてもらいます」

「はあ」

「小説家になれるんじゃないですか。次は、最初から井之さんに、お願いしようかな」
「そんな」

「いえ、決めました。まじに井之さんのコーナー、企画会議に出しますから。考えといってください。じゃあ、入校しますから」

あわただしく電話は切れた。

追い詰められて何も浮かばず、ひねりだした戯れ言だったが、豚もおだてられれば。

「小説家に、か」

滅多にない爽快感に、ひとり勝手に照れて、右手で左手を握ったとき、指先に冷たい感覚が宿った。

「連れ合いつて」

文章に〈連れ合い〉と書いていたとき、私の頭に浮かんでいたのは、智美だったと気づいたのだった。



誰にも話していないけれど、智美が事故に遭った前日、彼女と会っている。

行き詰まり、散歩にでも、と外へ出た夕方、歩きはじめた私に、彼女が声をかけてきた。待ち伏せしていたらしい。私は苛立ち、無言で、睨んだ。

「ごめん。邪魔なのは、わかってる。ただ、明日……」

黙っていると、彼女は、それ以上、何も言わず、淋しく微笑み、右手をさしだした。

瞳が震えていた。私ははやく済ませたくて、乱暴に手を握り、足早に立ち去った。以前よりも細く、冷たい指の感触が掌に残ったが、それもすぐに消えたのだった。



こんな時間に、と思いつながら、懐中電灯を手にかざして家を出た。線香一本持つてこなかったが、せめて、手を合わせたい。

寺の境内は、先ほどまで降っていた雨で、ぬかるんでいた。闇夜だった。懐中電灯で、地面を照らして、進んだ。

懐中電灯の灯りが、蠟燭の火を消すように、ふっと消えた。電池を入れかえてきたばかりなのに。

立ち止まった私の足に、何かしがみついた。うふふ、と微かな笑い声が出た。私は、その小さな頭を、しずかに撫でてから言った。

「そこに水たまりがある。さあ」

暗闇に、そっと手をさしだす。細く冷たい指が、私の指にふれた。